

Takashima Toujyu Kai

会報

No. 30
2022.9.15

高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行

NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224

滋賀県高島市安曇川町上小川 225-1

藤樹書院・良知館内

電話・FAX 0740 (32) 4156

<http://takashima-tojukai.com/>

「藤樹人間学塾での学び」

高島藤樹会理事 今城克啓



藤樹人間学

塾へは、人間力を高めたり身を修めたりするための学び

びが必要だと思っている時にお誘いをいただいたご縁で、参加させていただくことになりました。

初参加は平成三十年四月でしたが、まず驚きだったのは、月一回の開催をその時点ですでに八十回も重ねて来られたということです。

このような学びというのは、知識として習得するというよりも、参加を重ねていくうちに何となく体に染み込んできて、人間力を高める生き方をだんだんと「体認できる」ようになるということです。

参加するたびに、テキストに加えて、時事問題や経済および経営などに関する充実した資料を毎回選んでご準備されることにも頭が下がり、コピー代だけで学ばせていただくことに恐縮してしまいました。

このような資料を活用しながら、藤樹先生の教えの実践と経済の活性化との結びつきを具体的に教えてい

ただくなど、新鮮な学びをいただいています。

理解についても、体認できるということについても、自分自身はまだまだ不十分な状態ではありますが、「中庸」と言われる次のような生き方の大切さに気付かせていただいています。それは、大宇宙が進化し続けていることに伴って人間も進化し続けた、人間として進化していく方向の生き方だということです。

・親孝行だけではなく、万物を慈しむ「孝」。

・愛情ホルモンを産む「利他」の精神。

・意（主観的なもの、恣意）、必（無理に押す）、固（固執）、我（自己中心の考え）の、四つを取り去る。

・中立ということではなくて、両者の共通する利益を見つけて一緒に実現する。

高島市はこのような教えが長年に渡って人々の暮らしに根付いている地域だと思っています。例えば、世界に誇る高島市の発酵文化の「酵」は、「酒」と「孝」の字が組み合わさっており、発酵文化は、自然の摂理に沿って万物を育てるという意味で、藤樹先生の「孝」の教えと重なるものであると塾長から教えていただき

ました。

一方で、世界的には、プーチン政権によるウクライナへの侵略戦争とともに、各国で非民主主義が台頭するなどの厳しい情勢にあると言えます。

世の中が衰退していく時は、「中庸」から離れる人を讃える傾向が強まると、人間学塾の教材に書かれてありました。



このように厳しい世界情勢の中だからこそ、「中庸」に沿った藤樹先生の教えや、藤樹先生の教え

に重なる高島市そして日本の文化や産業の価値を再認識し、誇りを持って世界に発信していかなければならないと思います。

藤樹人間学塾は令和四年十月に百三十回目を迎えます。お菓子を食べながらの楽しいフリーストーキングもあり、自分自身が人間として少しでも進化するためにも、高島市や日本の価値をもっと知るためにも、これから学んでいきたいと思っています。

ひじりの声 上田 藤市郎

毎年八月には広島、長崎の原爆による犠牲者慰霊の式典が開催される。あの戦争は日本の国家が起こしたもので、日本軍は近隣諸国に向いて他国の軍人や民間人を殺し、最終的に日本軍や日本の民間人が米国をはじめ他国の反撃によって犠牲となった。ロシアとウクライナの現実そのものであった。戦争は、他国の人間を殺すことができるように人間の心を変えてしまうのである。ここで忘れてはならないのは、殺しに行く人と殺される人は、いづれも一般の市民であるということだ。戦争を指揮している国の責任者は危険な場所へは出向かないし、敗戦後も生き延びている。そして、かれらは言う、「選挙によって選ばれ、国民の多数意見に従ってこの戦争を行ったのである」と。

「民主主義」といっても必ずしも完全なものではない。多数決を悪用すれば、政治を任された党や為政者が独裁者であれば、憲法を変えることができるし、裁判官も支配できる。かつての日本がそうであったように戦争に反対する市民を拘束して投獄することもできる。中国、ロシア、ミャンマーにその例を見ることが出来る。

今の日本の憲法のように、国家が戦争を始めることができないようにするのは、一定の歯止めにはなるが完璧ではない。平和を維持するために兵力を増強する論理は拒否しなければならぬ。それは戦争につながる。

令和四年度 定時総会が開催される

今年度は、コロナ感染防止対策を講じて、定時総会を心のセミナーと併せて、六月十一日(土)に安曇川公民館にて開催しました。今年度の主な事業の計画、および新役員は次の通りです。また、心のセミナーでの吉田公平先生のご講演内容は、四頁をご覧ください。

今年度の事業実施の方針

◎中江藤樹先生の遺徳に親しむ高島市民をはじめすべての人々に対して、先生の思想の現代的意義研究、顕彰及び普及を図るため、当会のビジョン「温かくて深い、近江聖人中江藤樹の『孝』」の思想を高島から全滋賀へ、全国へ、全世界へ広める」に沿って、以下の事業を行う。

- ・心のセミナーとして、二月ごろ藤樹先生の教えに関係する適切な講師を招いて講演会を実施する。
- ・表彰事業は、令和五年の定時総会時に実施するよう準備する。
- ・毎月、藤樹人間学塾を行って先生の著書『鑑草』を学ぶ。
- ・藤樹紙芝居CDデータをアフレコ編集し、高島市内の幼保小中学校に無償配布し、一般販売も行う。
- ・小学校における道徳の授業に使える「藤樹紙芝居」の授業プランの活用を推奨する。

- ・保育園、幼稚園、こども園、区自治会等で藤樹紙芝居を上演して、先生の教えが子供たちからお年寄りまで幅広く親しまれるように図る。

- ・当会の趣旨、活動内容が周知されるよう『会報高島藤樹会』の充実を図り、年3回発行する。
- ・小中学生から藤樹先生についての作文を募集し、会報に掲載する。
- ・三月七日の立志祭(小学三年生)に理事が出向き、お話や記念品贈呈を行う。
- ・ホームページを当会の活動にリンクさせて、さらに充実を図る。

新役員の紹介(敬称略)

常務理事 へ()内は担当委員会

田中 清行(会長・学習)

湊田 豊朗(副会長・フォーラム)

三田村治夫(企画広報)

今城 克啓(表彰)

伊庭 郁夫(思想普及)

理事(再任)

川越 清司 飯田 典子

清水 鉄次 川島 達郎

前川 為夫 木村 健治

志村 洋 武田 基裕

湊田 京子

理事(新任)

藤原 浩之 嬉野 公人

海東 英和 西沢 恵利

地村 俊彦

監事(再任)

松井 清 西澤 幸夫

「藤樹紙芝居」のCD化とその配付・販売

思想普及委員会が中心となって、より身近な方法で多くの市民の方々に親しんでいただけるよう「藤樹紙芝居」に音声吹き込んでCD化しました。令和三年度には、次の五作品を制作し、市内各園・小中学校、図書館に寄贈し、また、一部を一般販売としました。

「馬方又左衛門」「車が田に落ちた」「そばやのかんばん」「志を立てる」「大野了佐を教える」

なお、それぞれのCDを活用した道徳科の学習指導案を作成し、小中学校に配付しました。



藤樹人間学塾： 藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに、時事問題と組み合わせることで議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

■ 四月、第百二十四回人間学塾の参加者は八名でした。

● テキスト

『鑑草』の第一巻「孝行と不孝の報い」の第二話と第三話。

● あらすじ

第二話「ある一家に様々な困難な状況が押し寄せたが、三代にわたる婦人の孝行のお陰で一家に大きな幸福が訪れた」、第三話（略）

● 配布資料

平川理恵さんの生き方、等。
フリートリーキング

- ・ 近年、三十代、四十代の離婚が増えている↓辛抱することを教えられていないからだろう。
- ・ 辛抱しなくて離婚しても生きていける豊かな世の中である。
- ・ 親が子供を過保護して自立を妨げているケースもある。↓人類は知識の蓄積はでき豊かになったが思いやりの精神など人間学は一から学ぶ必要がある。

■ 五月、第百二十五回人間学塾の参加者は四十代の初参加者を入れて十名でした。

● テキスト

『鑑草』の第二巻「守節背夫の報い」の序と第一話。

● あらすじ

「郡の長官の家に生まれた房氏は、幼いころから清らかな心を持っていた。成長して嫁いだ家は貧しかったが、（以下略）」

● 配布資料

横田南嶺「色即是空」等。

● フリートリーキング

- ・ 寡婦の手で育てられた子は父親より出来が悪いというのはなぜだろうか。↓経済的な側面があったのではないか。
- ・ 今日の話も心にヒットした。改めて学び直すことが大切だと気付かされた。



■ 六月、第百二十六回人間学塾の参加者は大阪からの初参加者を入れて十一名でした。

● テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第二巻第二話、第三話。

● あらすじ

第二話「張氏の妻、計夫人は、聖人の教えを大事に守っていたが、二十五歳の時に張氏が亡くなった（以下略）」

● 配布資料

日経「私の履歴書：矢野龍」等。

● フリートリーキング

- ・ 矢野氏の生い立ちは私の父の境遇と似ていて、不幸なことがあってもそれが人生の節になって成長していけるものだと感じた。
- ・ 両親が早く亡くなったがルーツを知りたく家系図を作った。今ある命を大切に生きたい。

■ 七月、第百二十七回人間学塾は初参加者三名を含む十四名の参加でした。うち女性が四名でした。

● テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第二巻第四話、第五話

● あらすじ

第四話「不義密通していた男が帰ってきた亭主の優しさを知って（以下略）」

● 配布資料

竹田弘行「孝経」が教える生き方」等。

● フリートリーキング

- ・ 古文書を調べていると、江戸時代の女性は意外に力を持っていたことが分かる。

- ・ 日本のジェンダー（性別）差別は今なお根強いと感じている。
- ・ 強欲な夫と賢明な妻の話は、現代にも通じる。

■ 八月、第百二十八回人間学塾は九名の参加でした。

● テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第二巻第二十三話〜二十五話

● あらすじ

第二十三話「李尉の妻は世にもまれな美人だったが（以下略）」

● 配布資料

吉田公平先生の手紙「藤樹の性善悪混然説について」等

● フリートリーキング

- ・ 藤樹先生の性善悪混然説について、確かに人間を見ていると自分も含めて性善説、性悪説で括れない面があると考えている。
- ・ ユングの『タイプ論』の中に中江藤樹が出てくる。藤樹先生は最晩年、人間は性善、性悪の二極を超えたものであるとみられていたのではないか。

等の意見をいただきました。ありがとうございます。人間学に関心のある方は是非お越しください。心からお待ちしています。

藤樹人間学塾 今後の予定

十月一日（土）、十一月五日（土）、

十二月三日（土）、一月七日（土）

■ 時間（原則） 十五時〜十七時

■ 場所（原則） 安曇川公民館

中江藤樹・心のセミナーから

吉田公平先生の講演内容（前編）

『今、藤樹先生の教えをどう活かすか』

今日、海東さんにおいていただいたのは、僕の強い希望でした。実は二〇〇八年の藤樹先生生誕四百年記念大会の前後に、その当時、高島市の市長さんは海東さんでした。その時、小生の藤樹先生研究の現状を述べました。福島県の会津・喜多方には中江藤樹さんを好きな人達がたくさんおられました。藤樹先生が亡くなったのちに藤樹先生の学びをどのように受け継ぐかを課題にしたグループがたくさんありました。熊本・大阪・京都・伊勢、後は江戸です。



それから会津・喜多方です。全国的にみんながお互いに切磋琢磨し、資料を交換しながら学んでいました。明治の初めまで続きます。その資料を丁寧（ていねい）に吟味して残していたのが、会津・喜多方の人達なのです。そのことに最初に気がついたのは東洋大学に勤めておられた東敬治さんです。お父さんは東澤瀉（ひがしたくさ）です。岩国出身の陽明学者です。その息子さんである東敬治さんは学歴無しで東洋大学の教授になれたのです。あの当時は学歴無しでも大学の教授になれたのです。その一例が幸田露伴（こうだろへん）です。京都帝国大学の中国文学の先生になりました。露伴さんは「こんなつまらん仕事はやってられない」と一年で辞めてしまいます。内藤湖南（ないとうこなん）さんは大阪朝日新聞の記者をしていました。彼を京都帝国大学の教授に推薦したのは創立委員の狩野亨吉（かののうけきち）さんです。秋田県出身です。物凄く変わった人です。文部省の役人を怒鳴りつけて抗議しました。しかし、妥協して講師という身分で人事を認めさせ、のちに教授に昇任させました。東洋大学は私立大学ですから、むしろかしいことは云われない。学歴無しで大学の先生になった人は何人もいます。その代表者が東敬治さんなのです。東敬治さんが会津・喜多方の人とであり、そこに藤樹さんの後

継者たちが、藤樹思想をどのように展開したのか、という基本資料がまとめて残っていることを知りました。そこで東敬治さんは直接に会津・喜多方に出かけて行って、自分で筆写したのです。それが東洋大学に残っています。小生は広島大学を辞めて東洋大学に赴任した際に、早速その基礎資料を確認しました。

中江藤樹研究では大変大きな役割を果たした人が二人おられます。西（にし）普一郎（しんいちろう）先生と木村光徳（きむらみつとく）先生です。小生は広島大学に在職中は木村光徳先生にしばしば教えを請いました。また西普一郎先生は広島高等師範学校の教授でしたから、その教え子の先生達に西先生の事を教えていただきました。

木村光徳先生は会津・喜多方に向いて中江藤樹さんのお弟子さん達の資料を自分で写されました。奥様もよくお手伝いされたとの事です。その資料集を出版されました。

小生が東洋大学に赴任した折、鐘紡（かねつむ）を退職した小山國三（こやまくにぞう）さんが東洋大学の科目等履修生としておられ、一緒に学ぶことになりました。小山國三さんは会津出身の方ですので、「あなたの郷里にはこういう文化資源が眠っているのですよ。木村光徳先生も紹介していますけれども、資料的には大変問題があるのです」と述べ

て、小山國三さんに「資料整理をお手伝いしていただませんか」とお願いしました。小山さんはじっくりとお考えになり、「やります」と決意されました。読み上げるのに五年かかりました。小山さんが下読みしたものを小生が確認する作業が延々と続きました。次は出版です。出版はなじみの研文出版。しかし、この種（しゅ）のものは売れません。困り果てていた時に、中江藤樹生誕四百年祭の時に、当時の高島市市長さんであった海東さんにお話ししたら、即座に出版費用の半分を引き受けてくれました。「市議会は大丈夫ですか」と心配したほどです。大洲市の市長さんも「高島が出すならば同額を出します」と承知していただき、出版することができたのです。高島市さん海東市長さんの決断に敬服して感謝しております。

中江藤樹さんが非常に大きな影響を受けたのは王陽明（おうやうめい）です。しかし、哲学的にはそのお弟子さんの王龍溪（おうりゅうけい）です。王龍溪の語録を若い人と読みこんで、それを出版する段取りになり、科学研究費の出版助成を申請したのですが、二年経って却下されました。その原稿が宙に浮いている状態です。中国の友人が「中国で先に印刷しましょうか」と述べてくれているのですが、そうすると著作権は中

国にいつてしまいます。版權は日本で確保したいのです。これが出版されると、中江藤樹理解ががらりと変わり、内容理解が一段と深くなると思います。

学術的に歴史的に非常に意味のあるものは、あまり売れないのです。そうすると出版社は二の足を踏んでしまいます。中江藤樹先生のものが本格的に出版されたのは、岩波書店から出た『藤樹先生全集』全五巻です。資料収集・校訂など非常に丁寧に行われ、よくあそこまで実現できたなあと感心します。西普一郎先生の人徳でしょう。高島に縁のあった皆さんが力を結集されました。時運も幸いました。藤樹先生に「日本の精神文化の象徴」を見出されました。この全集が今も根本資料として活用されています。

高島の皆さんにお願いしたいことがあります。その当時、岩波書店とやりとりしたときの資料が藤樹書院に残っております。原本資料、転写初稿、校正資料、それらを比較調査して、出版の経緯を解明していただきたいのです。

藤樹さんの思想を考える時に、一番魅力的なのは書簡です。例えば西普一郎先生は藤樹さんの『中庸』理解を註解しておられます。尤も抽象化された理論的なものです。それに

対して、書簡は生身のお弟子さんとのやりとりです。より良く生きるための心掛けとか、親切に（自らの事として切実に）、お互いに声を掛け合っています。小生の『日本近世の心理学思想』（研文出版）の冒頭に「カウンセラーとしての中江藤樹」があります。カウンセラーというのは相談する相手の人と一つになって、その人が抱えている課題を自分も引き受けて、どう乗り切るかということとを相談して助言するというのがカウンセラーなのです。これはしんどい役割です。友達同士の話し合いでは埒の明かない、ぎりぎりの段階で、「やはり先生に相談してみよう」ということになります。大勢の人は手紙で相談します。藤樹さんは手紙で返事をしていきます。残されている藤樹さんの書簡の冒頭に質問の概要は記されています。ですから、当時の人の悩みや苦しみが非常に良く分かります。今の時代に通ずるテーマが非常に多いのです。藤樹さんの返事をもった人はその内容を自分用に写し取って、元の書簡は友人に廻すのです。「良く生きる」上で肝心の助言が記されているわけですから、金言集なのです。同一内容の書簡が文体を少し変えて複数残っている所以です。「良く生きる」意味を藤樹さんに教えたのはおじいちゃん



です。「良く生きる」ための指針は今日でも大事な事です。それは単なる「知識」ではなく、「良く生きる」現場で活かされる智慧が肝要なのです。知識の人であった林羅山が「鸚鵡」と非難された所以です。

藤樹さんが生きた十七世紀は中国の学術情報が怒濤の如く入って来ました。しかし、教えてくれるお師匠さんがいない。漢文の読み方は少し習いましたが、内容理解は独学でした。何度も読み返して会得する努力を続けました。この努力には頭が下がる思いがします。

新しい知識が入って来たときに、それを消化して紹介する役割を果たす人物が欠かせません。林羅山はそ

の紹介者の役割を担った人でした。仮に学説医学だけだったら患者は死にます。患者をいかすのは具体的な診断と処方箋です。藤樹さんは国内戦争が無くなって「明日も生きられる」平和な時代に生きました。「共に生きる」時代になったのです。さらに幸いしたことは、武士をやめたことです。武力で支配する役割をしなくともよい。「二市民」に立って、武士・農民と共に学んだのです。大洲から来た武士に対しても、戦い（殺し）の学びは一切していません。

石田梅岩の「心の学び」も「良く生きる」事が主題でした。石門心学に集まったのは町人・商人が主流でした。武士はいません。男女共学でした。「女に学問はいらない」と言われていた時代に、参加者の半分は女性でした。

高島には清水安三記念館があるとお聴きしました。清水さんは中江藤樹さんは隠れキリシタンだったという独自の考えを述べた人として知られています。一九三〇年代に北京に女子教育機関を設立したかたです。同じ時期にイプセンの「人形の家」が女性解放の戯曲として話題を攫いました。日本では小山内薫が築地小劇場で上演されました。そのころ仙台医学専門学校で学んだ魯迅は中国では時期尚早であると反対意見

を述べました。知識も生活力もない女性がノラのまねをして社会に飛び出したら、行く末は野垂れ死にか媚婦になるしかない。そういう状況のなかでの清水安三さんの活躍は瞳目に値します。

同じ頃、京都の綾部に郡是（現：グンゼ株式会社）という会社がありました。創設者はクリスチャンです。女工といえども同じ人間であると理解して、女工さん全員に「より良く生きる」ための高等教育を施したのです。良識をわきまえた人はいつの時代でもおられるのです。

藤樹さんの時代には日本は平和になり、中国の外交関係も安定して、中国から学術情報が一気に沢山入ってきました。中国の輸出港は餘姚（よよう）です。王陽明と縁の深い港です。四百年の落差がありましたから、日本側はビックリしました。明治時代の初めにヨーロッパ学の情報が一気に日本に入ってきましたとき、日本の知識人がビックリしたのと同じです。大方の知識人は「鸚鵡」の役割を果たしましたが、自立した思索者も誕生します。その典型が西田幾多郎です。

明治憲法の時代は、男の人にとっては、「いかに生きるか」ではなくして、「いかに死ぬか」がテーマでした。人生二十年です。兵隊にとら

れて戦場に派遣されたら大方は一年以内に死ぬのです。藤樹さんは「死ぬ哲学」とは無縁でした。民主主義とは制度のことではありません。民一人一人が自分の人生の主人公だという意味です。選挙のときは棄権をしない。候補者のなかに共感する人がいない時には自分の名前を書いた方がいいのです。勿論無効票になりますが、でも、民主主義を支持する意思表示にはなります。候補者を育てるのは選挙民です。一人一人が「良く生きる」ことを大事にすることが肝腎なのです。中江藤樹さんは民主主義の時代の人ではありませんが、「良く生きる」ことを主眼にして門人知友と切磋琢磨した人でした。

（次号につづく）

講演内容は、渕田豊朗副会長によつて文章化されたものです。

後編は、次号に掲載しますので、お楽しみにしてください。



「藤樹かるた」の紹介④

（企画広報委員会）

（かるたと解説）

て 天と地と 先祖に感謝

十二歳

藤樹先生は十二歳の頃には、食事の時にはいつも天と地の恵み、そしてご先祖、両親の労苦に対して感謝しつつ、ご飯のいただける喜びを感じておられた。



あ 新しい 年を迎えて
詩を詠む

藤樹先生は歌や詩をたくさん作っておられるが、二十六歳の正月「小川村に一人で暮らしている母が心配である。一日も早く故郷へ帰り、人の子として最も大切な親への孝養を尽くしたい」とやむにやまれぬ気持ちを詩に書いておられる。



さ 先に立つ 農夫衣服を改める

藤樹先生の死後の話。ある時、ひとりの武士が西近江路を通り、先生のお墓にお参りしようとして、道ばたで働いていた農夫に道を尋ねると、その農夫はまず家に帰って、衣服を着替えてから、玉林寺門前のお墓へうやうやしく武士を案内した。その農夫の心構えに驚くとともに、先生の遺徳の偉大さに改めて敬服した。



き

氣立てよく まめに働く
久子夫人

藤樹先生の夫人である久子さんは、たいへん氣立てがよく、素直で骨身を惜しまず、陰日向なく、よく働かれたと言われている。



ゆ

夢に見た 故郷めざす
雪の旅

愛しい母へのあかぎれこう葉を持って、故郷小川村の母に会える喜びを胸に、雪の寒さの中を旅する与右衛門（藤樹先生）。苦勞の末、よ



うやく会えた母は、こう葉のみを受け取ると、厳しい叱咤の声とともに、与右衛門を雪の中、大洲へと帰した。そこには、子进行母と、母进行子の言葉を超えた、熱い愛情があつたことと思う。

藤樹かるた制作委員会委員

足立清勝・飯田典子・石黒紀代子・
北川暢子・清川貞治・高谷美智子・
山本義雄（五十音順）

藤樹記念館通信 ⑬

安曇川中学校チャレンジウィーク
（職業体験実習）をとおして

近江聖人中江藤樹記念館

武田 基裕

中江藤樹の教えの様にユニバーサルに伝わる平易な表現、持続可能でやわらかな表現、わくわく感のある表現で伝える努力をします。でも、また、堅い表現が多くなるかもしれません。その節はお許しください。

七月下旬から八月月上旬にかけて、安曇川中学校二年生の生徒さん女子二名、男子五名が「職業体験学習」に來られました。以下、本事業の目的です。（１）実際に働くことで勤勞に対する正しい認識をもつ、（２）貴重な体験を通して自らの進路決定の参考にする、（３）人々とのふれあいを通して社会人としてのマナーを学ぶ（全て安曇川中学校資料

抜粹）とあります。これらの目的は基本のキですから、受け入れ側もしっかりそれらを意識しながらの職業体験実習となります。今回、体験いただく予定だった仕事は、接客業務は外し、庶務的な仕事、主催事業の準備、施設内清掃、維持管理等々でした。しかし、コロナ感染状況が悪化し、主催事業が中止となったため大きく方向転換しました。実習時間も短くし、中江藤樹の教えを学んだり、庶務業務を増やしたり、学芸員の業務を学んだりしながら「職業体験」していただきました。

生徒さんたちの体験を支援しながら、コロナ禍での学びや日常の部活動、中体連の大会の様子等のことを話していると、心底、「若い」って



素晴らしい、羨ましいと思えてきます。この子たちは「これから」なんだと自然に伝わってきます。わたしたちの世代も「これから」という時も「ほんのたまに」ありますが、それにはかなり無理があります。「若さ」は財産です。何でも吸収できるこの多感な時期にキャリア教育を行うことこそ意義があります。若い感性を生かしながらキャリアを積んでいつて欲しいと願いながらの職場体験です。

一方、多感どころか、喜怒哀楽も少なくなり、鈍感の極みになりがち。な。昨今、それらの若い方に生きた職業の楽しさや、厳しさを伝えることは難しいことですが、責任は重大です。

昨年から、知り合いの学校職員さんから頼まれ市内二中学校の職業体験実習を受け入れています。実際、平常の業務にプラスの業務となり、職員には負担はかかるのですが、地域の子どもたちを育て、本施設を認知してもらい、人の行き交う藤樹記念館とするために小規模施設ですが、たくさん生徒さんに來てもらうようにしました。日頃は年配層の方の來館が多いのですが、この期間、中江藤樹もきつと若い方が実習に取り組んでくださっていることを喜んでおられるでしょう。

学齡期の職業体験、キャリア教育という、もうかれこれ三十年ほど

前から実践されてきた歴史があります。そう言えば私の息子たちも中学生の頃、地元の事業所さんにお世話になっていました。短期間でしたがたくさんのことを教えていただいた記憶があります。

七月二十八日(木)の実習初日には実習生七名全員が顔を揃えてくれました。皆さん、元気で礼儀正しい生徒さんばかりです。当初の予定ではこの日から「了佐てらこや小学校」という市内の多くの小学生が参加する事業があり、実習としてその事業のサポートをしてもらう予定をしていました。感染状況悪化のため、やむなく中止にしたので、実習予定は大きな変更を余儀なくされました。これは仕方のないことです。二年ほど前から、コロナ禍により何度も予定を変更してきました。Don't mind!と、何をやってもらおう。正直なところです。沢山受け入れた手前、弱音は吐けません。しかし、それほど庶務業務があるわけでもありません。一般の来館者の方も、この状況下減少しています。来館者が多ければそれなりの庶務業務も発生するのですが。そこで、この状況を好機ととらえ、中江藤樹についての学びを深めてもらう機会としました。職業体験というよりも藤樹や儒学の学びも機会です。毎日、本来の業務を少し体験していただいた後に、中江藤樹に関して学びを深め

たり、学芸員の仕事に関する講義を聴いたり、映画「中江藤樹」を鑑賞したり、また、ほんの少し藤樹に関する読書もしていただいたりしました。イレギュラーな職業体験となりましたが、生徒さん方、少しもいやな顔をしないで、真摯に実習に取り組んでくれました。



秋には湖西中学校の生徒さんを受け入れます。今回ほど多くの生徒さんではないのですが、個々の実習をサポート予定です。今回、実習ノートの最後の感想に大変うれしいことを書いてくれた生徒さんが多く、職員一同安心しました。「仕事の楽しさが分かって良かった」、「職業体験で良い時間が過ごせた」、「将来の良い経験ができた」、「初めは少し戸

惑ったが、途中からしつかり実習することができてよかった」等々の感想です。

職員も数日間、若い世代の方と時間を共有する機会を得て、刺激をいただき、「さあ、またがんばらないと。」という気持ちになりました。多くの学びの中で、書物中心の学びもあり、また、実践をとおして人から学ぶ機会もあり、それぞれに良い面があるものです。中江藤樹は「知行合一」という教訓で、「物事は書物で学んだだけでは本当に知ったことにはならない。学んだことを実践してみても初めてわかったことになるものである。」と説きました。すごく説得性のある言葉だと思っています。頭だけで理解するのではなく、人間の五感をフル活用して実践してこそ価値があるということでしょうか。藤樹没後三百五十七年が経ちますが、真理は引き継がれています。しつかり学び、実践する。簡単なようで簡単ではありません。

賛助会員一覧

ご協力ありがとうございます。

- ウエストレイクホテル可以登楼
- 税理士法人 淡海総合会計
- 大津公証人会 白髭博文
- 大溝工業 株式会社
- 株式会社 大山建設
- 岡本アルミ建材 株式会社

- 川島酒造 株式会社
- 川島織布 株式会社
- 株式会社 Grow's
- 株式会社 桑原組
- 有限会社 宏和商事
- 税理士法人 小畑会計事務所
- 佐治タイル 株式会社
- 株式会社 澤村
- 株式会社 シグマックス
- 清水安三記念館
- 有限会社 白浜荘
- 新旭電子工業 株式会社
- 杉橋建設 株式会社
- ソエダ 株式会社
- 高島鋳建 株式会社
- 田中マネジメント事務所
- 株式会社 TADコーポレーション
- 鉄屋商事 株式会社
- 寺子屋まなざし童心塾
- 有限会社 天平フーズ
- 株式会社 戸井薬局
- とも栄 藤樹街道本店
- 株式会社 ナカサク
- ナカシヨウ 株式会社
- 株式会社 中田運送
- 株式会社 中村測量設計
- ニッケイ工業 株式会社
- 八田建設 株式会社
- 有限会社 馬場塗装
- 富士包装紙器 株式会社
- 戸次会計事務所
- 株式会社 ホリゾン
- 株式会社 ヨシダヤ
- 株式会社 リンクス
- 有限会社 綿庄食品店